

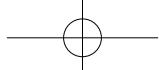
Project
Operation
Sight for
All

POSA 事業報告

No.13

●平成21年度





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA 目 次



理事長の言葉

『奪えば、奪われる』

POSA 理事長 医療法人輝秀会理事長 倉富 彰秀 P1

理事より

『第9回バングラデシュアイキャンプ』

POSA 副理事長 菊池眼科院長 井上 望 P2

ライオンズクラブより

『バングラデシュ・ボリバリ村・クリニック建設』に際し

神崎ライオンズクラブ会長 納富 良治 P3

『アイキャンプ並びにボリバリ村クリニック竣工式に同行して』

神崎ライオンズクラブ 野口 守 P4

『バングラデシュに思う』 神崎ライオンズクラブ 吉原 俊樹 P6

アイキャンプ参加者より

『POSA 9th アイキャンプ』 国際エンゼル協会 バングラデシュ責任者 アジズル・バリ ... P10

『POSA アイキャンプに見る感謝と喜びの空間』

特定非営利活動法人 国際エンゼル協会 前田 泰宏 P11

『アイキャンプに参加して』 菊池眼科看護師 春日 望 P12

『POSA アイキャンプに参加して』 国際医療福祉大学三田病院眼科 視能訓練士 井上香奈子 P14

『アイキャンプに参加して』 久留米大学医学部 2年 (※ 2008年12月時点の学年です) 石井智佳子 P16

『アイキャンプに参加して』 佐賀大学医学部医学科 1年 (※ 2008年12月時点の学年です) 森山 恵理 P18

『バングラデシュに行って』 東明館高等学校 2年 (※ 2008年12月時点の学年です) 倉富 杏理 P19

『バングラデシュへのアイキャンプを通して』

早稲田大学高等学院 1年 (※ 2008年12月時点の学年です) 倉富 佑也 P20

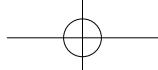
『アイキャンプに参加して』 東明館高等学校 1年 (※ 2008年12月時点の学年です) 江崎 円香 P22

平成 20 年度事業報告及び平成 21 年度事業計画

平成 20 年度・平成 21 年度事業報告書 P23

御支援を頂いた方の一覧表 P24

POSA 理事・監事名簿・POSA 名誉会員・POSA 規約 (一部抜粋)・入会のお願い P25



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『奪えば、奪われる』
POSA 理事長 医療法人輝秀会理事長
倉富 彰秀



先日、職員旅行で湯布院に行った。
時間があったので、ぶらぶら歩いていると、そこにもあった。
そう、城たいが（じょう たいが）の店が。
その店で日めくりカレンダーを買った。
その日めくりカレンダーの中にひとつ、その言葉は
あった。

『奪えば奪われる、与えれば与えられる。』

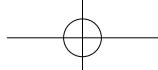
ところで、
2007年には、今永先生、阪谷先生、伊崎先生、
井上先生の御寄付によってバングラデシュのホリモ
ンジュリ村に学校が建設された。

2008年には、高橋先生、今永先生、井上先生、
と私、及び神埼ライオンズクラブの御寄付によって
電気も来ていないボリバリ村に初のクリニックが建
設された。このクリニックは今後、バングラデシュ
アイキャンプのスクリーニングセンターのみなら
ず、この地区及びその周辺村落で唯一の診療所とな
る予定である。

また、POSA会員の方々より、毎年1万円の会
費、及び任意のご寄付もいただいている。

ありがたいことである。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『第9回バングラデシュアイキャンプ』

熊本県菊池市 菊池眼科医院

井上 望



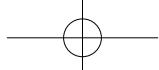
バングラデシュの医療活動に参加して今年が10年目となります。日本では現地の事情をある程度理解されている私の廻りの方々から「バングラデシュでのボランティアはお疲れでしょう」とか「あんな遠方に行って大変ですね」などのお気遣いの言葉をかけていただきます。ただ、私自身はボランティアに参加して、その活動を苦痛と思った事は一度もありません。むしろ楽しみながら医療活動を行っています。当初は日本とはあまりにも異なる状況を目の当たりにして戸惑う事も多い日々でした。しかも手術を受ける現地の患者さんは、眼が見えない事以外にも厳しい社会の現実と向き合っています。バングラデシュで流れ作業の様に手術をしている私達には、手術台に横たわった患者さんの個々の事情は、もちろん分りません。その様な事を深く考えると手術後の達成感が吹き飛んで落ち込んだ気分になってしまって、最近ではあまり考えない事にしていました。そのため私自身ボランティアを「楽しんでいる」のは不謹慎ではないかとさえ思ってしまいました。つまりボランティアはある程度の悲壮感をもつ

て活動しなくてはいけないと自身に言い聞かせていました。

その様に思っていた昨年、同じくボランティア活動を行っている中田英寿さんや桑田真澄さんが言われていた「楽しくなければボランティアではない」との文章を目にしました。「自分の生活を犠牲にしてまで無理にボランティア活動しても長続きはしません。楽しみながら行うのが長続きする秘訣です。楽しんでいる事が現地の人にも解れば更に歓迎されます。」

長年思っていた心の中のモヤモヤがこの一言で救われた気分です。そうなんだ、今後のボランティア活動も今まで通りで、楽しみながら手術すれば良いのだと思いました。改めて考えてみるとボランティア活動しているすべての人々に少なからずこの「楽しむ」との気持ちがあるのではないでしょうか。私達は今後もボランティアを楽しみ、そしてこの活動を通じて知り合った素晴らしい仲間や現地の方々とのつながりを人生の財産にしたいと考えています。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュ・ボリバリ村・ クリニック建設』に際し



神埼ライオンズクラブ会長 納富 良治

今回の第15回、アイキャンプ（バングラデシュ第9回）に際しましては、ボリバリ村に倉富先生をはじめ有志医師（Dr 今永、Dr 井上、Dr 高橋）ライオンズクラブ国際協会、神埼ライオンズクラブによりクリニック建設という事もあり、当クラブよりメンバー2名（L 野口、L 吉原）が同行致し視察を行い315-B1（ダッカ）ニューバナリーライオンズ、国際エンゼル協会、POSAの協力団体とも面識が持てた事、感謝する次第です。私も同行したかったのですが期日が12/20～12/25という年末の忙しい時期で同行出来なかつた事、申し訳なく思っております。

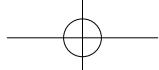
此の『クリニック建設』によりバングラデシュの

多くの視覚障害者に光を取り戻し、夢や希望を持たせていただき社会復帰の機会を与えていただく事をお願いします。

POSAの倉富彰秀先生をはじめ家族の方、スタッフ一同の皆様、毎年バングラデシュ、アイキャンプ、ご苦労様です。各個人が持つておられる技術を生かし、世界の多くの患者の手術に役立てて下さい。私達、神埼ライオンズクラブもスポンサーとして微力ながら今後共協力させていただくつもりです。

最後に、POSAの活動がますます発展し、世界の多くの方々に感謝されますよう心からご祈念申し上げます。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプ並びにボリバリ村クリニック 竣工式に同行して』



神埼ライオンズクラブ 野口 守

インド及びバングラデシュでの15回目（バングラデシュ第9回目）のアイキャンプ継続実施に対し、まずは倉富Dr、井上Dr、今永Dr、高橋Drへ心より敬意を表したいと思います。

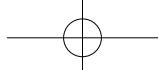
また、同行されたDrの奥様やご子息のいきいきとした奉仕の笑顔に触れて、私自身も幸せな気持ちになりました。ありがとうございました。

さらに、今回の参加でこのアイキャンプがバングラデシュにて円滑に継続されているのは、国際エンゼル協会バングラデシュ支部（本部 兵庫県伊丹市）との連携が必要不可欠であり、現地責任者のアジズル・パリ氏の存在があって成り立っていると言っても過言ではないかと思いました。

このエンゼル協会は現地で運営するエンゼルスクール、エンゼルホーム、農業研修センター、職業訓練所、そしてヘルスケアセンターなどの施設で人々の自立支援を目的に活動されており、人は財産であるとの視点で様々なチャンスを与える愛の活動が基本です。

すでに、この施設から巣立った人材が各地でリーダーとして活躍しているとの事で、この活動に大きな感銘を受けました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

さて、今回のクリニック建設ですが、お陰様で首都ダッカより車で約3時間ほど北に離れたボリバリ村に倉富Dr、井上Dr、今永Dr、高橋Drの寄付とライオンズクラブ国際財団からの交付金や僅かですが神埼ライオンズクラブからの助成金にて白を基調としたすばらしい建物の竣工となりました。

しかし、このクリニックは近い将来アイキャンプはもちろんの事、新たな診療拠点として活用が計画されておりますが、まだまだ内部や備品等充分では無く、今後も計画的に支援活動が必要と強く感じております。ライオンズ関係へ呼掛けたいと思います。

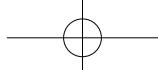
バングラデシュへ4泊5日の行程参加させて頂きましたが、たくさんの体験と思い出ができました。

ダッカに入り想像以上の人の多さと生活文化の低さを見て、単純に「日本人で良かった」と正直に思い、日本の良さをあらためて感じました。一方、この人々は高い生活文化そのものを知らないので我が国の貧困はとくに意識しておらず、こちらが心配するほど危機は感じていないように思えました。

また、現地の子ども達と日本から持参した凧やここまで一緒にふれあつたのしいひとときや歓迎会など久しぶりにほのぼのとした気持ちになりました。

むすびに、今回の参加にて数々のすばらしい体験を与えていただきましたすべての関係者の皆さんに心よりの感謝と合わせて皆様方の今後益々のご健勝を祈念申し上げます。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュに思う』 神埼ライオンズクラブ 吉原 俊樹



アイキャンプについては、2回目か3回目ぐらいから、神埼ライオンズクラブメンバーとして参加掛けを受けておりましたが、どうしても年末の日程に合わせる事ができず、ここ10年間ほど毎年12月になるといつも気になっており、今回やっと念願が叶い、個人的には感慨深い参加となりました。

バングラデシュは狭い国土に世界一の人口密度とは聞いていましたが、空港を出たとたん数えきれない数のリキシャと譲り合いや交通マナーも見当たらないクラクションのみで我先に縦横無尽に行き交う車の波が道いっぱいに広がる光景に驚きました。

たくさんの人々の大きな人ばかりは両側のみちゆきに移動中数時間にわたり、行けでも行けどもとめどなく見られ、どこからこの人々はわいてくるのだろうと不思議な感じがしました。「人ごみ」とよく言いますが、まさしく街中に行くとそこらじゅうゴミが散乱し、ほこりまみれで、工業用化学染料や汚

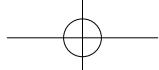
水などは垂れ流されており、衛生環境づくり以前に人々のモラルの低さを感じました。

また、この10年間程でレンガ工場や外資系繊維工場が雇用確保のためかと思われますが、無秩序に中途半端な状態で建設が進んでおり、かつての日本が経済至上主義に走り人的公害問題などで大きなつけを払わされた歴史と重なり合い、将来への危惧を感じました。

想像以上に生活環境・インフラ整備は進んでおらず、キャンプするエンゼル協会の施設に着くまでは、覚悟はしていたものの「これは大変なところに来てしまった」というのが正直な第一印象でした。

しかし、アイキャンプが行われるコナバリ村のエンゼルハウスに到着すると、敷地周辺は柵が設けられており、清掃と緑の手入れも行き届いた別世界、孤児をはじめスタッフから心のこもった笑顔の歓迎に不安も一瞬にして吹き飛びました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

さっそく、施設内クリニック、農業研修センター、エンゼルスクールなど隣接する施設をバリ氏の説明を受け視察しましたが、NGO組織であるエンゼル協会の取組みには深い感銘を受け、合わせて、何かと不透明さが問題視される海外援助もこの地なら十二分に生かす事ができると確信しました。

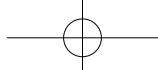
さて、今回の目的であるクリニック建設地であるボリバリ村はアイキャンプ地より車で3時間程度離れており、まだまだ田園が広がる自然豊かでのどかな場所にありました。

最終的には、でこぼこの道無き道（日本人の感覚）の先に囲まれたバリ氏所有の広大な敷地にエンゼル協会により1990年に建てられた2階建ての学校と並んでクリニックが建てられていました。私達の到着に300名～400名ぐらいの村民が出迎え、盛大な竣工式が開催となり、まさしく村をあげての心からの歓迎を受けました。

しかしながら、建物はできたものの、施設としての機能は充分ではなく、電気・水道をはじめ今後も数年間計画的に整備が必要であり、同行した野口氏とともにライオンズクラブ国際財団LCIF交付申請の手続き継続とクラブ支援をあらためて強く感じました。

このあと4日間の滞在でしたが、エンゼルハウスにてホストクラブであるダッカニューバナリーライオンズクラブを迎えて、施設内の孤児やPOSA若手メンバーの歌や踊りが披露されたもりだくさんの歓迎会をはじめ、YURIKOエンゼルスクールへ出向き、持参した日本のこまや凧で子ども達とふれあったり、孤児と真剣にバトミントン勝負したり、最終日にはここ数年で数え切れないほど増えたというレンガ工場の煙突が気になり構造の確認を行ったりとあつという間の4日間でした。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

今回とくに感じたのはいくつかあり、途上国に行くといつも感じますが、ふれあう子ども達は物おじしない輝く瞳と何事にも興味を持つ豊かな感性を感じさせる雰囲気があり、天真爛漫、日本では最近あまり見ない「子どもらしい子ども」であり、力強いのびのびとした本来の子どももらしさがありました。とくに施設の子ども達が朝早くより患者さんに声を掛けながらの愛を感じる自然体での献身的なお世話には深い感動を受けました。

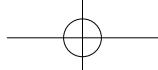
近年、日本では豊かな生活の反面、子ども達の現状は自尊心が薄れ、目標を失い、倦怠感までを思われる態度の子ども達が増えており、対人スキル、コミュニケーション力の欠落などいわゆる「生きる力」の育成が大きな課題となっています。贅沢かもわかりませんが、豊かさゆえの日本の教育現場の不登校やモンスター・ペアレンツ問題など、ある意味すさんでおり、今となってはどちらがほんとうに幸せなのか正直疑問を強く感じました。

また、イスラム文化は、神への奉仕を重んじ、信徒同士の相互扶助関係や一体感を重んじる点に大きな特色があると聞いていましたが、とにかく人々は明るく楽しく語り合いフレンドリーな雰囲気があり、見た目は貧困で生活レベルは低いものの、我を張ることもなくすべての人々がささえあい、いきいきと人間らしく生きている感じがしました。

日本では地域社会で人と人とのつながりが希薄になり問題視されていますが、足るを知る事や孔子の中庸の徳で述べられているように、個人主義に走り、必要以上に生活文化スタイルを求める弊害だと変に納得しました。

倉富医師が掲げられる POSA のモットーである all that is not shared is lost 「わかつち合われないすべての物は失われる」も基本的にはこんな事ではないかと感じました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

昨年、神埼ライオンズクラブにてオリジナル絵本「おもやい どがしこでん」を作成しましたが、この「もやい」という言葉は九州地方で古くより使われており、「わけあう」「一緒に使う」などの意味で食べ物をわけあったり、道具を一緒に使うときに使います。さらに、太陽の光や空気、森や海の自然もみんなでほんとうは「おもやい」しています。だから、その気持ちは環境問題や限られた資源のエネルギー問題にもあてはまりとても重要です。笑いあつたり、もらい泣きしたり、これも「おもやい」で人のつながりにも言えます。

この言葉文化を広めようと出版しましたが、きっと倉富医師も長年にわたり国境を超えてこんな気持ちで取組んでおられるかと感じ、今回の参加により、今、私達が一番大切にしなければならないものとして確認できた気がします。

とくに、援助や支援の功績が称えられる事も大切ですが、このアイキャンプを行う事により、たくさ

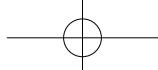
んの出会いや発見により、ある意味私どもに価値観の見直しや大切なものの見つめ直しや見落としのきっかけなど、与える側がその活動により逆にもたらされるものがたくさんある事を実感しました。

最後になりましたが、エンゼル協会のパリ氏、前田氏をはじめスタッフのみなさんアイキャンプやクリニック建設に伴う現地での準備や手配から私どもの受け入れに至るまでの対応に対し、心より感謝申し上げます。また、井上先生や賛同して参加された皆さんをはじめ倉富ファミリーのみなさんほんとうにお世話になりました。

日程の調整がきけばまたお世話になりますのでよろしくお願いします。

これからも、縁あって結びついたエンゼル協会、POSA、ライオンズクラブの組織と人々の崇高なそれぞれの思いと活動が末永く続き、発展します事を祈念して報告とします





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSA 9th アイキャンプ』 国際エンゼル協会 バングラデシュ責任者 アジズル・バリ



2008年11月から手術の必要がある人たちの選別が始まりました。5ヵ所の村で男性677名、女性1,437名、子供88名の2,707名の人たちを現地の先生が診察し、薬を処方し、アドバイスをしました。その中から85名が白内障手術を受けることになりました。

12月21日に日本から眼科の医師たちがバングラデシュに来られ、コナバリのエンゼルの診療所で手術が始まりました。男性36名、女性27名の63名でした。その他の人たちは交通手段が整わなかつたこと、家族の事情などで手術に来ることができなつたようです。

10月9日は世界視力の日です。バングラデシュでもその日はいろいろなプログラムが各地で行われましたが、今年のテーマは「大人の視力を守る」でした。バングラデシュでは約75万人の人たちの目が見えません。その中の90%の人は50歳以上の人たちです。バングラデシュの人たちの目が見えなくなる主な病因は白内障、緑内障、糖尿病、網膜芽細胞腫などがあげられます。

バングラデシュでは白内障をサポートするためにビジョン2020プログラムがあります。

BNSB, ORBIS, SIGHTSEVERなどの団体が各地で活動しています。いろいろな活動を行っている中で様々な問題に出会います。熟練した医師が足りないことや、金銭的な問題です。

そこでPOSAを通じて、第9回まで日本の医師の皆さんやライオンズクラブの皆さん、POSAの会員の皆さんの協力で、バングラデシュの農村の人たちの目を救うことができたのは本当にすばらしいことだと思います。

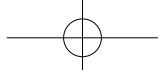
光が見えない人生は、色が見えない人生です。私たちの住んでいる世界は様々な色で染まっています。その色は様々な物を区別しています。しかし、目が見えない人々は区別することが出来ず、そのため不自由な生活を強いられています。

バングラデシュでは毎年5万人もの人々の目が見えなくなっています。

今回POSAの皆さんの協力でカパシア郡ボリバリ村に新しい診療所を建てることが出来ました。私はこれからもバングラデシュでPOSAの旅を続けたいと思います。

皆さまのご協力を心から感謝しています。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSA アイキャンプに見る感謝と喜びの空間』

特定非営利活動法人 国際エンゼル協会



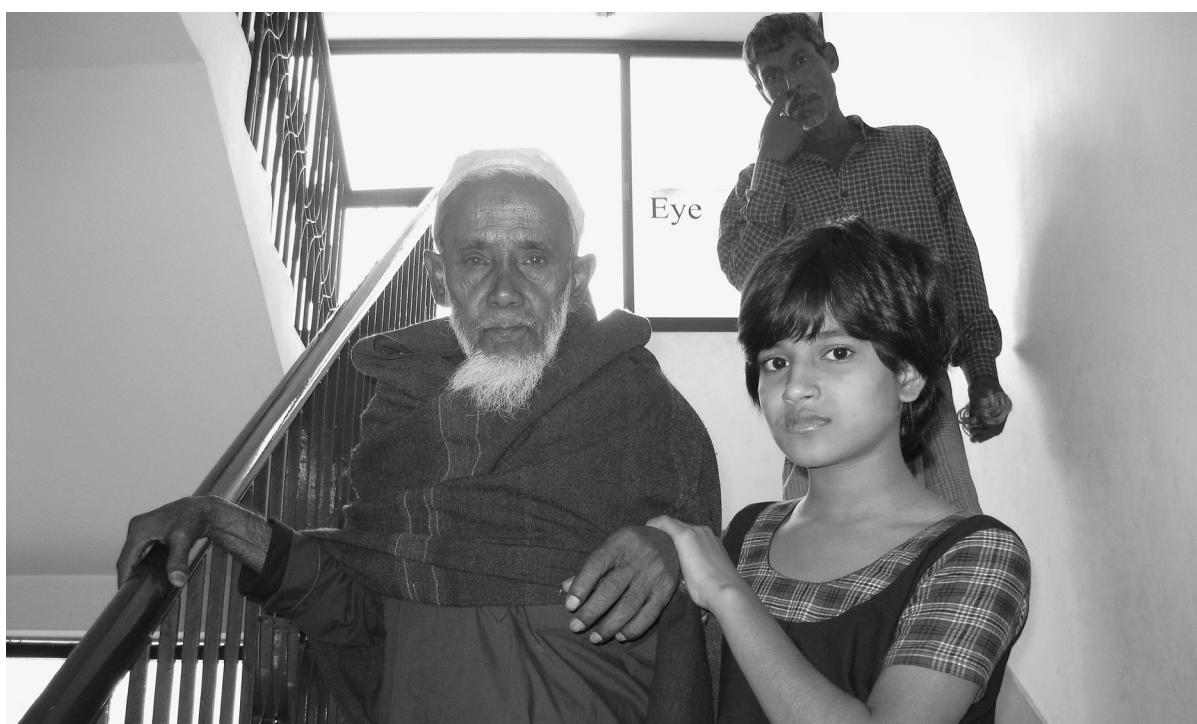
前田 泰宏

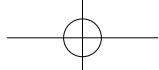
2008年12月21日から23日まで白内障の手術が行われました。白内障で目を奪われ自分自身の生活も自由に行えず、家族の助けが必要な63人の人たちが目に明かりを取り戻し、足取りも軽く田舎に帰って行きました。63人の患者さんはもちろん家族の皆さんも遠い日本から来てくださったPOSAの皆さんに本当に感謝の言葉を述べて帰つて行きました。エンゼルホームの子供たちも手術後まだ自由に動けない患者さんの手を引き術後検診にクリニックに連れて行ったり、部屋に連れ戻つたり本当にすばらしい経験が出来ました。他の人の役に立つ喜びを小さな頃から感じることは人として社会の中で生きていくためには本当に必要なことのように思います。エンゼルホームの中に多くの喜びと感謝が生まれたPOSAのアイキャンプの成功に感動

しました。これからも少しでも長くまた一人でも多くの白内障に苦しむ患者さんが救われることを祈ります。

今回はまたボリバリクリニックの完成に際してPOSAの倉富医師、井上医師、高橋医師、今永医師そして神埼ライオンズクラブの協力を得られたことに感謝いたします。

最後に、神埼ライオンズクラブの野口様、吉原様が本協会の会員になってくださいました。また、倉富医師、井上医師の奥様が里親会員を募つて下さると言つていただけたことに感謝いたします。パングラデシュのより多くの学生たちが勉強して、眼科医師になりPOSAの皆さんのが志を継いでくれることを願います。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』 菊池眼科看護師 春日 望

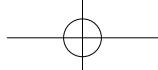


眼科に勤務して今年で6年目、アイキャンプでの活動は院内の受付の横に置いてある冊子や写真を見て何となく知つてはいたものの、まさか自分に参加するチャンスが来るとは全く思つていませんでした。院長からアイキャンプへの参加のお話を聞いた時、迷わず参加の返事をしました。のん気な私はバンダラデシュがどこにあるのか、どんな国なのかもよく知らないまま、あつという間に出発の日が近付いてきました。出発を目前にして隣国インドでのテロや、バンコク空港の封鎖などで日程や航路の変更もありましたが、無事に出発の日を迎えることが出来ました。久しぶりの海外、しかも今までっぱら観光地にしか行ったことのない私は飛行機に乗り込んでも今ひとつピンと来ないままでした。

長い旅路を経てダッカ空港に到着したのは深夜でした。少々疲れもあり、ちょっと眠たくなついた目はいっぺんに覚めました。真夜中だというのにものすごい人の数、なかでも以前テレビ番組で見て衝撃を受けた物乞いする子供たちの姿、息苦しくなりそうな土埃、車道では車線やルールなんて関係なく前も後ろも横もスレスレの運転、その隙間を渡る歩行者、運転手全員が鳴らしているんじゃないかと思うくらいのクラクションの音、日本ではありえない風景に私は思わず送迎バスの窓に貼りついていました。

翌朝、エンゼルホームの子供たちに挨拶をしました。子供たちはみんなニコニコしていて可愛らしく、とても様々な家庭の事情でここにいる子たちだとは感じさせない温かさがじみ出ていました。とても人なつっこく、農場の見学の時も腕を組んだり手を繋いだり、子供たちと過ごす時間は自然と笑顔になり、とても癒されました。





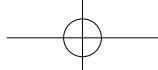
ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

白内障の手術には2日間携わる事が出来ました。手術室は想像よりもはるかに立派で驚きました。前日の準備から片付けまでみんなで役割を分担して頑張りました。手術では日頃使用している器具がすべて揃っているわけではない事と、患者さんに言葉が通じない事が大変でした。壁に貼り付けてある紙を見ながら一生懸命「まっすぐ見て」「右見て」などの言葉を言ってみてもさっぱり通じず、自分でもこんなに通じないものかと少し笑えました。手術を受ける患者さんはかなり白内障が進行していて、誰かに手を引いてもらわないと歩けない方がほとんどでした。日本ではこんなに進行してしまう前に本人や家族が手術を受けたいと眼科に来ることがほとんどですが、バングラデシュの家庭では厳しい経済状況の中で医療費を捻出することは困難なのだろうと感じました。アイキャンプの存在はバングラデシュの人々により多くの希望と力を与えるものだと実感しました。

今まで、家族が健康であり毎日頑張れる仕事があることは当たり前の事のように感じていましたが、アイキャンプに参加して私の周りに今の環境があるということはありがたい事なんだと感謝しなければいけないと思いました。

最後になりましたが、倉富先生と奥様、井上先生と奥様、参加されたスタッフの皆様、本当にお世話になりました。一生忘れられない貴重な経験が出来ました。本当にありがとうございました。また機会があればぜひ参加したいと思います。3食のカレーとマンゴージュースの味も絶対に忘れません。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『POSA アイキャンプに参加して』 国際医療福祉大学三田病院眼科 視能訓練士 井上 香奈子



今年、東京から参加させていただいた私の「初」アイキャンプは、タイ航空バンコク空港占拠事件が12月初旬を過ぎても解決を見ず、波乱の幕開けとなりました。航空券をいかにGETするか？一見過酷な状況すら、まるでゲームのように、余裕で楽しんでいらした倉富先生のナイス・リードで、より安価かつ乗継時間の短いマレーシア航空での出発が決まり、ようやくホッとしたのでした。

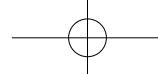
さて、私が今回参加させて頂いたのは、職場の上司である国際医療福祉大学三田病院の藤島教授が眼科国際支援に関するNPOを立ち上げられたところであり、こうした活動は身近な存在だったことと、(寄付も大切ですが)自分でも実際の活動に参加してみたいと思ったからです。ですから、眼科学会でPOSAアイキャンプのこれまでの実績や、倉富先生のスピーチを伺い、すぐにメンバーに立候補しようと、事務局宛に手紙を書いたのでした。

結果、倉富先生から快諾のメールを頂け、職場の藤島先生からも激励を受けて、期待と不安で一杯に

なりながら、単身成田から参加することになりました。その時の晴れがましい気持ちは、今も鮮明です。

さて、私の担当は白内障術前、術後の検査でした。言い訳ではありませんが、初日は朝から、孤児院の子どもたちに歓迎され、一緒に散歩。他にも、蒸しパンづくりや歓迎パーティー。空き時間には、自分の撮った写真を見せて、あれこれお喋り。そうした「バングラデシュ」体験の方が、眼科専門職としてのアイキャンプ活動よりも記憶に鮮明なのです。在園児らも患者さんの誘導を率先して行なっており、手術中には患者さんの手を握って不安のないよう話かける係を務める。術後は、まだ眼帯の取れない患者さんらに食事の介助を行なう。過去のアイキャンプで既に習慣になっているのでしょうか、優しさにあふれた応対の中に無駄のない動き。医療職でなくともボランティアとして、私たちの模範となっていました。空き時間には、必死に窓まで背伸びして、手術を見学する姿も印象的でした。



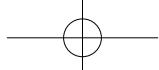


ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

私は参加前、ボランティアとして自分が何かを貢献したいと、大変気負っていたと思います。役に立てるかも不安でした。けれど、実際に参加してみると「やってみないとわからなかつた」ことばかり。国際協力とは、途上国への施しではない。現地の人たちと同じ体験をし、協力し合いながら互いに理解、共感することだと感じました。理解し合えたという感動は自分を豊かにします。そんな幸せな気持ちを、

他にも多くの人に味わってもらいたい。日本に戻った今、自分の体験を周囲の人に伝えながら、志を同じくする仲間を増やしていきたいと思っています。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』 久留米大学医学部2年 石井 智佳子



バングラデシュでのアイキャンプから帰国して、2ヶ月ほど経ちました。アイキャンプでの日々は今でも鮮明に思い出すことができます。アイキャンプで見たこと、感じたこと、経験したこと全てが、私を成長させてくれたとともに、新しく、そして心強い道標になってくれることでしょう。アイキャンプでの一瞬、一瞬を胸に、学生として、多くのことを吸収し、広い視野を培つていこうと改めて感じています。

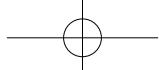
私は、人との出会いは必然であると考えています。今回のアイキャンプでも、たくさんの素晴らしい出会いがありました。帰国後しばらく頭から離れなかつたエンゼルホームの子供たちはもちろんですが、医師としての志と愛情をもつて患者様に接しておられた先生方、夜の宿舎で時間を忘れておしゃべりしたGirls!!たくさんの素敵なお方々と出会うことができたこのアイキャンプに参加することは私の運命だったのかもしれない、そんな風にも思います。

そもそも私がこのアイキャンプに参加するきっかけは、自分のアルバイトをしている飲食店のお客様に、自分は将来、医師として海外の途上国や無医村で働くのが夢である、とお話をさせていただいたからでした。そう考えると私はあのお店であのお客様との出会いが無ければ、私はアイキャンプについて知ることもなかつたかもしれません。

そうすると、、、、、考えるうちにきりがなくなってしまします。

私はまだ学生ですので、アイキャンプの一員としてお役に立てたか、というと正直何も貢献できていなかつたと思います。しかしその分、自分はできる限りのことを学び、吸収するように努力したつもりです。オペ室に入ることも人生で数回目、という感じで、室内を流れる空気感には緊張し、戸惑いました。





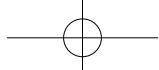
ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

しかし、そこで熱心にオペをされている先生方や看護師さんの姿には感動を覚えました。一番驚いたことは、手術中に停電が起きても全く何事も無かつたかのように手術を続けられていたことでした。日本で実際に先生のところへ診察に来られる患者様だけではなく、日本から遠く離れた国で経済的理由によって治療を受けることが出来ない患者様にも失った光を取り戻そうと力を尽くして居られる姿は、ただ一言、素晴しく、憧れを抱きました。先生方の姿を目にしっかりと焼き付けました。

エンゼルホームの子供たちの笑顔と人懐っこさも忘れることが出来ません。言葉で全てが伝わったとは思いませんが、手をつないで一緒に遊んだことにより、たくさんのものがシェアできたのではないかと思っています。歓迎会で歌ってくれた歌声に思わず涙してしまいました。また、別れがこんなにも辛いものになるとは、当初は思いもしませんでした。

何のお役にも立てず、スタッフの皆様には大変ご迷惑をおかけしたことと思いますが、私はまだ学生である、このタイミングでアイキャンプに参加させていただけたことは大変有意義であったと考えています。直接治療に当たる先生方や看護師さんの様子を身近で拝見させていただけたことはもちろんですが、自分が将来の進路への一歩を踏み出すことができたと思うからです。アイキャンプでの経験と感じたことを大切に、今自分が出来ることに精一杯取り組んでいきたいとおもいます。貴重な経験を本当にありがとうございました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』

佐賀大学医学部医学科1年 森山 恵理



今回御縁があってバングラデシュアイキャンプに参加させて頂くことになりましたが、大変貴重な体験をさせて頂きとても感謝しています。

私は医学生ですが、看護師の資格も持っているので、アイキャンプでは看護師として2日目と3日に手術のお手伝いをさせて頂きました。

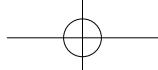
2日目は外回り看護師として手術室に入りましたが、入室する患者さんは皆強ばった表情を浮かべており、中には顔にドレープを掛けただけで怯えた声を出したり、手で払いのけようしたりする人もいました。少しでも支えになればと、手を取ってしっかり握ると、握り返してきた患者さんの手から不安や恐怖が伝わってきました。言葉が伝わらなくても、そういう気持ちを共有したり共感したりすることは出来るのだと実感しました。このことは医師になっ

ても絶対に忘れてはいけない、大切にしたいと思います。

3日目は器械出し看護師として手術に立ち会わせて頂きましたが、最先端の医療機器を使った最先端の技術を受けることが出来る、或いは提供することが出来る日本で学ぶ中、機械を使わずに必要最低限の器具を使って手術をすることはとても新鮮で、けれどこれが医療の原点なのだと思うと、貴重な体験が出来て本当に良かったと思います。

アイキャンプに参加して、知識や技術の未熟さを痛感し、もっと役に立ちたい、もっと学びたいと強く感じました。この気持ちを忘れずに、看護師として、また将来医師になる身として自分に出来ることをこれからももっと見付けていきたいし、そのため一層の努力を積んでいきたいと思います。本当にありがとうございました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュに行って』 東明館高等学校 2年 倉富 杏理



今回で自身三度目となるアイキャンプへの参加は、前二回の体験を活かしてバングラデシュにより密接した日々を過ごすことができ、内容の濃い経験を積むことができました。

三度目ということでバングラデシュの風土も少しずつだけれども理解し、エンゼルのみんなとも上手くコミュニケーションを取ることができました。たった5日間の滞在でしたが、彼らのあたたかい心に触れ、再会の約束をしたほどでした。一緒に居る時間が長くなるにつれ彼らの優しさを大きく感じる様になりました。

こんなに澄んだ心でいられるのは何故だろう、日本にいる時より落ち着いていられるのはなぜだろう？その理由はバングラデシュという国、エンゼル、を支える人々の強い想いなのかなと思いました。

アイキャンプの中で私は患者さんの誘導や記録のお手伝いしか出来ずあまり役に立てなかつたと思います。けれども、手術室内で活躍している医師や看

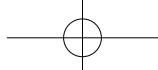
護師の方々の姿を見て、私もあの場に立って患者さんが光を得る機会に直接関わることができたらどんなに素晴らしいことだろうかと思いました。

地方のクリニック建設予定地を見学させてもらったとき、地元の人々が建設に関わる方々に向ける熱い眼差しは、地方で医療が必要とされている事をしっかりと物語っているようでした。

今回、バングラデシュで多くの事実を直接肌で感じたことは、今後私がすべき事を見出せた気がします。今、私に出来る事は限られているけれども、いつの日かあの手術室でアイキャンプを支える方々、アイキャンプを続ける方々と共に私もお手伝い出来ている事を想い、今出来る事を精一杯しようと思いました。

今回、アイキャンプに参加させていただいた事は、私の志を改めて見つめ直し、しっかりと立てる支えになりました。素晴らしい体験をさせて頂きありがとうございました。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『バングラデシュへのアイキャンプを通して』

早稲田大学高等学院1年 倉富 佑也

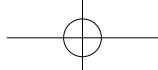


私は倉富医師の甥で、以前からアイキャンプの主旨に共感するところがあり、この度一連の活動に参加させて頂くことが出来ました。ボランティア費用については両親の支援もあり、16歳にしてこのような機会を頂き本当に幸せです。

アイキャンプに参加して色々なことを「学び」ましたが、この「学ぶ」という言葉は、二通りの意味があります。一つ目は、「教えを受けて知識や技能を身につける受動的な側面」。またもう一方は、「経験を通して知識や知恵を得る能動的な側面」です。今回の一連のボランティア活動では、圧倒的に能動的な「学ぶ」が多かったように思います。ただ単にバングラデシュという僻遠の地で生活する、それだけで意識しなくとも膨大な量の経験を得ることができました。言語、宗教、環境、人種、気候、食べ物…。それらが大きく異なる国での生活は、毎日が新鮮で、驚きに満ちていました。そんな数々の経験の中で、より印象に残った場面を御紹介します。

首都のダッカに到着してから、5日目のことです。スタッフの方々と共に、行動拠点である国際エンゼル協会を離れ、バスで3時間ほど先にある新設した病院へ向かいました。しばらく進むと、整備された道路は途絶え、道行く牛車とすれ違なながらむき出しの土の上をひたすら走りました。もちろん水道や電気などのライフラインは普及していない、そんな場所での出来事です。無事に病院に到着し、コスモスの花輪と大きな拍手で熱烈な歓迎を受けました。その後セレモニーを終え、屋外で昼食をした時のことです。テーブルの上には、現地では馴染みのないティッシュペーパーや、ミネラルウォーターが置かれていました。これらは終始行動を共にして頂いたバリ氏の気遣いであったようですが、食事を終え帰ろうとした時のことです。現地の方々がテーブルを片付ける際に、机上に残ったペットボトルやティッシュペーパーを、食事の残りかすと共に地面に捨てたのです。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST

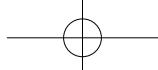
日本で言うポイ捨てである。と、同時に強い憤りが脳裏によぎりました。「ゴミ箱に捨てろよ…」わたしはとっさに以前現地に在住されていた国際エンゼル協会の前田氏に疑問を投げかけました。「なぜ、あの方はなんの抵抗もなくゴミを地面に捨てるのですか」と。答えは単純でした。彼らは自然に帰るゴミしか知らなかつたのです。彼らに無論ゴミ回収車などない。

しかし本来、彼らの出すゴミは全て自然に帰ります。だから、ごみの「ポイ捨て」は何の弊害もないのです。そんな習慣が残る中で、ペットボトルやティッシュペーパーという人工物が入ってきたのでした。そう考えると自然に帰るゴミの「ポイ捨て」は否定できない行動だと言えます。その後、前田氏はこう続けました。「その行動に至るには必ず理由がある。難しい事だが、他人の行動を多様な観点から見つめなくてはならない」と。他人を表面だけで判断した自分が情けなく感じ、反省しました。

上記は私が得た経験のごく一部です。そんな啓発される場面が積み重なり、バングラデシュでの経験という、ひとつの形を成しています。バングラデシュという国は、良くも悪くも日々発展しています。10年いや、5年後、バングラデシュはどんな国になっているのだろうかと。とても興味深いです。

最後に、それと言ったお役に立てない私でしたが、寛大な心で接してくれた大勢の方々、本当に有難う御座いました。一連の活動を経て様々な面で成長できたと感謝しております。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



『アイキャンプに参加して』 東明館高等学校 1年 江崎 圓香



私はバングラデシュに行って多くの人の手を握った。その中には喜びの手・幸せの手そして不安の手・悲しみの手があった。私が一番心に響いた手は、手術を受けたおばあさんの手だった。

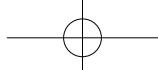
私は手術室の外回りや患者さんの誘導をしていた。その時私が待合室を見回すと、一人のおばあさんが手術の恐怖と不安で怯えて涙を流していた。私は何をすれば良いのか分らず、ひたすらおばあさんの手を握ったのである。

最初のうちは何かベンガル語で嘆いており、私はその言葉は理解できず正直困っていた。しかし、私は絶対にその手を放さなかつた。その後、何時間もおばあさんの手を握り続けた。すると、おばあさんが笑顔になった。おばあさんはその時「とても安

心しています。あなたのような人と出会えて幸せです。」と、言ってたそうだ。私はおばあさんがそのように思ってくれていたとは知らなかつたが、安心しているという事はなんなく感じた。私はその時、「人間は心を込めて手を握り合えば言葉の壁を越えられる」と、確信した。確かに言葉は大切かもしれない。しかし、手を握り合つた時に伝わってくる温もりの中には、普通の会話では得ることのできない何かがあると思う。

私がバングラデシュに行って学んだ事は、まだまだ多くの事があるが、最も私の心に残つた物はこの事だった。私はまたバングラデシュに行き多くの手を握りたい。そして、多くの事を学び、自分の人生に活かしたい。





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



平成 20 年度事業報告書



＜バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施＞

実施期間：平成20年4月1日から平成21年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション (IAA) 本部

クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医及び現地助手

＜バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布＞

派遣期間：平成20年12月19日から平成20年12月25日まで

実施期間：平成20年12月21日から平成20年12月22日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション (IAA) 本部

クリニック施設にて

派遣員：

眼科医2名 井上 望 倉富 彰秀

看護師3名 春日 望 倉富亜由美

森山 恵理

視能訓練士1名

一般参加6名

井上香奈子

井上 麻紀 石井智佳子

江崎 円香 倉富 佑也

倉富 杏里 倉富 菜々

野口 守 吉原 俊樹

対象患者数：63名

活動内容

今回バングラデシュアイキャンプも9回目となりました。現地の眼科疾患の症例調査及び2202名の患者さんを対象としたスクリーニングアイキャンプ及び63名の白内障手術を実施し、近くの小学校にビタミンAの配布も行った。

国内啓発活動

バングラデシュアイキャンプへの寄贈品、募金、参加の呼びかけ

バングラデシュの現状についての啓発活動

平成20年度事業報告書

平成 21 年度事業計画書

＜バングラデシュ眼科診察

及びスクリーニングアイキャンプの実施＞

実施期間：平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション (IAA) 本部

クリニック施設にて

派遣員：現地眼科医及び現地助手

＜バングラデシュアイキャンプの実施

及びビタミン配布＞

派遣期間：平成21年12月23日から平成21年12月31日まで

実施期間：平成21年12月25日から平成21年12月28日まで

実施場所：バングラデシュ国インターナショナル

エンゼルアソシエーション (IAA) 本部

クリニック施設にて

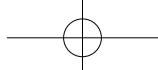
派遣員：日本からの眼科医及び看護師、現地眼科医及び現地助手

＜クリニック建設＞の継続

神崎ライオンズクラブにより、現地にクリニックを建設する。POSA有志の医師もライオンズクラブに寄付予定である。

実施期間：平成21年4月21日から平成22年3月31日まで

実施場所：バングラデシュ国ガジプール県カパシア郡ボリバリ村



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



温かいご支援ありがとうございました。

平成20年4月～平成21年3月
敬称は省略させていただきます。(順不同)



寄付者

世戸 憲男

菊池眼科医院患者様

荒木 勝子
松本 イク子
松本 チヤ
小池 さくら
鈴尾 恵美子
小柳 衛
高塚 久嘉

小森 啓範

小田 英夫

神埼ライオンズクラブ
医療法人社団 顕明会
須山 博
於保 實美

タオル 大石 ゆきの

川村 光子

メガネ 戸塚 富美子

国際ソロプチミスト久留米

大石 優子

今村 キミエ

河村 昭子

永岡 久幸

古川 静雄

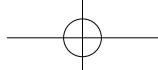
日高 生代

佐野 俊子

松永 進

船津 利彦





ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



POSA理事・監事名簿



| | | |
|------|-------|-----------------------|
| 理事長 | 倉富 彰秀 | (医療法人 輝秀会 理事長) |
| 副理事長 | 井上 望 | (医療法人 菊池眼科 理事長) |
| | 今永 至親 | (今永眼科 院長) |
| 理事 | 榎本 純一 | (大坪内科医院) |
| | 野口 守 | (萬永堂 代表) |
| | 林 敢為 | (介護老人施設グリーンヒル幸寿園 施設長) |
| | 橋 光幸 | (古物商 橋商事) |
| 監事 | 末永 博義 | (末永司法書士事務所 代表) |
| | 田中 雅美 | (田中雅美税理士事務所 代表) |

(敬称略・五十音順)

POSA名誉会員

| | | |
|------|--------|----------|
| 名誉会員 | 古川 康 | (佐賀県知事) |
| | 中尾 清一郎 | (佐賀新聞社長) |

(敬称略・五十音順)

POSA一般会員

| | | | | |
|---------|---------|--------|---------|----------|
| (株)アステム | 於保 實美 | 世戸 憲男 | (株)日本点眼 | 松本 博 |
| 東 キヨ子 | (株)科研製薬 | 高橋 身奈 | 野口 守 | (株)毛利工務店 |
| 伊崎 祐介 | 春日 望 | 高橋 美穂 | 野田 郁男 | 森岡 千鶴子 |
| 石井 智佳子 | 鐘ヶ江 正久 | 高橋 雄二 | 八谷 臨 | 森山 恵理 |
| 井上 香奈子 | 倉富 亜由美 | 橋 光幸 | 羽生 友美 | 安谷 久美子 |
| 井上 望 | 倉富 佑也 | 田中 博都 | 林 敢為 | 山口 克宏 |
| 井上 麻紀 | 小柳 孝博 | 田中 雅美 | 原 康夫 | 山近 史郎 |
| 今永 至親 | 財部 貴資男 | 田邊 樹郎 | 福家 育祝 | 吉原 俊樹 |
| 宇野 光次 | 佐伯 陽子 | 鶴田 遊山 | 戸次 宣史 | 与那嶺 豊 |
| 江口 アキラ | 阪谷 洋士 | 中村 イク子 | 堀 秀行 | |
| 大島 博 | 末永 博義 | 榎本 純一 | 松尾 隼雄 | |

(敬称略・五十音順)

POSA(ポサ) 規約 (一部抜粋)

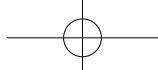
(目的)

第3条 本会は、眼科衛生学に関する知識の普及及び白内障・緑内障に対する研究・ボランティア活動を行い、視覚障害者の減少に寄与することを目的とする。

(入会金及び会費)

第7条 正会員は、入会金壱万円、及び年会費壱万円を納入しなければならない。

POSA一般会員入会は隨時受け付けております。ご連絡下さい。(POSA事務局 田中)



ALL THAT IS NOT SHARED IS LOST



歓迎の歌

Project Operation Sight for All

P O S A 事務局

〒842-0002 佐賀県神埼市神埼町田道ヶ里 2435-1

医療法人 輝秀会 くらとみ眼科医院

TEL : 0952-52-8841 FAX:0952-52-8765

ホームページアドレス <http://www2.saganet.ne.jp/posa/>

E-mail アドレス posa@po.saganet.ne.jp

2009年6月発行

